

< 編集後記 >

私事で恐縮ですが、情報連携基盤センターに着任して早2年が過ぎようとしています。「技術は役に立ってなんぼのもの」という信念のもと、名古屋大学ポータル、全学ID、全学メール、ホスティングサービス、ハウジングサービス、全学無線LAN、学生証・教職員証のICカード化などなど、いろいろな新しい取り組みを行ったり、行おうとしてきました。また、情報セキュリティ対策推進室をはじめ、名古屋大学ポータル編集局など、技術を支える組織づくりにもエネルギーを投入してきました。

このようにいろいろ挙げると、何か一貫性がないように思われるかも知れませんが、実は、これらの底流には「個別対応から基盤対応へ」という思想が流れています。例えば、昔は計算機1台ごとにユーザを登録していた時代がありましたが、それが、ネットワークで多くのコンピュータがつながるようになるにつれて、NISのような、研究室などの小グループ内でのユーザ情報の共有の仕組みが生まれました。今では、LDAPなどのディレクトリサーバのように、大規模なグループ内でのユーザ情報の共有がトレンドになっていまして、全学IDはまさにこれを狙ったものです。

また、セキュリティに関しても、メーラレベルでの暗号化送受信のように個々のアプリケーションによる対応から、SSL (Secure Socket Layer) が出てきてより低レベルのレイヤーでの対応となってきました。現在、附属図書館・情報メディア教育センター・情報連携基盤センターの3部局で文部科学省に要求している「全学ユビキタス・セキュア情報基盤」の中では、IDとパスワードだけでなく、ICカードとの併用、バイオメトリクスとの併用、ワンタイムパスワードなど、アプリケーションに応じたセキュリティレベルの確保が可能な環境を基盤システムとして導入することを検討しています。

さらに、名古屋大学ポータルでは、ユーザ認証、暗号化通信、セキュリティ確保、PCベースのWeb ブラウザだけでなく、携帯電話やPDA などでも閲覧可能なマルチプレゼンテーション機能などが基盤機能として提供されますので、個々のWebアプリケーションが対応する必要がなくなります。

このような個別対応から基盤対応により、ある特定の方々にしかな恩恵のなかった技術が、より多くの方が使われる「役に立つ」技術へ育っていきます。

「学問は深めるもの」が常ですから、このような思考パターンは大学という学問の場では直交する概念のように思われるかも知れません。しかしながら、情報学という学問分野では、「情報技術は人間生活において役立ってなんぼのもの」と考えれば、逆に基本となる概念ではないかと個人的には思っています。

法人化後、運営交付金に対して効率化計数を掛け、毎年配分額を減らすという、恐ろしい話が審議されています。これ乗り越える妙案も「個別対応から基盤対応へ」という思考パターンからしか生まれないのではないかと個人的には思っています。

(S.K.)